

方言イメージと地域イメージ

酒 井 充

1. はじめに

これは、京都府綾部市^{かへばやし}上林におけるナルからテヤへの方言変容に関する社会言語学的研究の一環として、1978年6月に行った調査である。方言変容を考える上で、廃れつつある方言や新しく広まりつつある方言が、どのように評価されているか、どんなイメージがもたれているか、ということは重要な問題である。権威ある方言が弱小な方言を没食すると考えた場合、方言イメージを分析するということは、方言の権威とはいったいどんな内容を含んでいるのかを分析するということである。

このような視点に立って、本論文では、『言語生活』に発表された井上(1977)の方言イメージの多変量解析の結果に新たな調査による実証的な検討を加えるとともに、方言イメージに反映していると考えられる地域イメージとの関係を数量的に抽出することを試みた。

2. 方言と地域

本調査で対象とした形式、「ナル」、「テヤ」は、身内尊敬用法として機能する敬語である。

ナルとテヤは次のような使い方がされる(下線部)。

ナル 人物ア：おばあさんおんなるかい？

人物イ：おんなれん。

人物ア：どこへ行きなったんやい？

人物イ：買い物に行きなったんや。

おじいさんはおんなるけど。

テヤ 人物ア：おばあさんおってかい？

人物イ：おってない。

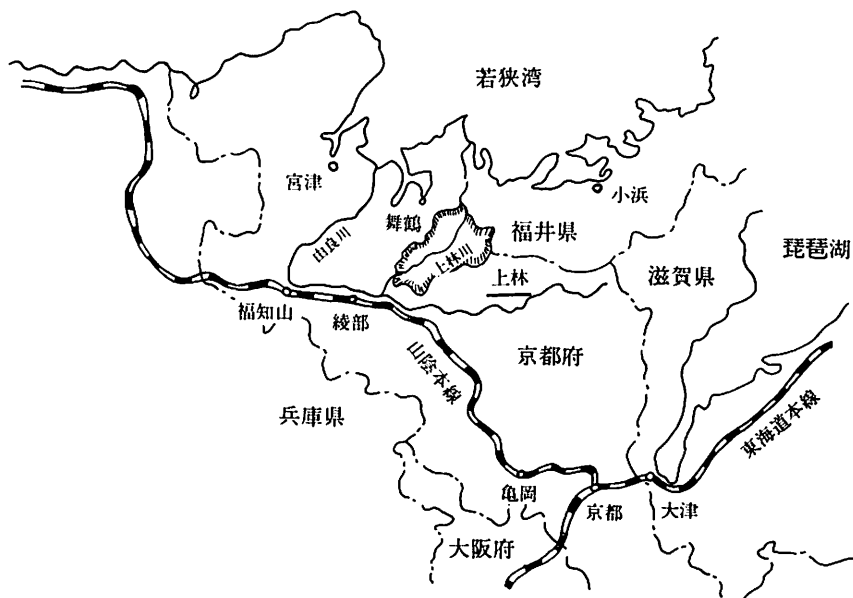
人物ア：どこへ行っちやったんやい？

人物イ：買い物に行っちやったんや。おじいさんはおってやけど。

この論文の中では「ナル」、「テヤ」という形でそれぞれを代表させることにする。

現在、京都府の綾部、福知山、舞鶴を中心とした丹波から丹後南部の地域にかけてはテヤの勢力が強く、同じ丹波に属する上林^{かへばやし}にはまだナルが残っているが徐々にテヤに変わりつつある(図1)。今回の調査で地域イメージを尋ねたのは、ほとんどテヤのみ使用されている綾部市の中心地域である旧綾部町(以下単に「綾部」と呼ぶ)と、ナルからテヤへの方言変容が進行する中で両者が併存している綾部市東部の農山村地域である「上林」についてである。

図1 京都府概図



ナルやテヤは、方言全体の中のほんの一形式にすぎない。しかし、綾部でナルを使えば他の言語要素とは関係なくそれだけで「上林弁」と言われることがあり、また、テヤの使用が盛んな舞鶴市では、数年前から新しく始められた祭りに、郷土の特色をよく象徴するものとして、テヤの過去をあらわす形であるチャックを冠して「チャック祭り」と名付けている。このように、ナルとテヤは、この地域の人々の言語生活の中では、使用頻度が高く、敬語であるということで極めて重要な働きをしている言語形式なのである。

3. 調査方法

方言イメージの評価語は、井上（1977）の用いた評

表1 被験者の内分け

居住地	全 数	性 別		学 年		ナル使用状況					テヤ使用状況				
		男	女	高3	中3	聞いたこ ともない	聞いた だけ	以前 使った	時々 使う	よく 使う	聞いたこ ともない	聞いた だけ	以前 使った	時々 使う	よく 使う
上 林	55	25	30	7	48	0	18	8	20	8	0	1	2	12	40
上林以外	80	37	43	80	0	29	45	2	2	0	0	1	1	16	62

被験者の内分けは、表1の通りである。

なお、評価語の分類については、井上（1977）のクラスター分析、今柴（1969）の因子分析の結果をそのまま用いた。本調査のデータについても、それぞれクラスター分析（最近隣法、最遠隣法、および群間平均距離法）、因子分析（主因子法にオーソマックス回転を施したもの）を行い、その結果は必ずしも彼らの調査からの結果と同一ではなかったが、彼らの結果をもとにして本調査との比較を試みることにした。また、方言イメージにおいて、一部分修正した評価語も井上の分類に対応させ、評価語のプラス、マイナス方向の判定は井上（1977）に従った。

4. 方言イメージ

1. ナル、テヤに対する全体的イメージ

全体として、情的評価では二形式間に差がなく、また、プラス側、マイナス側どちらにも寄らず中性的であった。しかし、知的評価では、ナルがマイナス、テヤがプラスに評価されていて、両者の間にはっきりとした相違がある。郷愁評価では二方言ともプラスに評価されているが、ナルはテヤよりも高くプラスに評価されている。（図2）

これをまとめたものが、表2である。

この結果を、井上（1977）の調査結果と比較してみ

る。評価語の内、「遅い——早口だ」を省き、「昔の言葉を使う——昔の言葉を使わない」を「古い——新しい」に改め、七件法ではなく五件法を用いた（図2）。また、地域イメージについては、今柴（1969）の評価語の中から「遅い——近い」を省いたほかはそのまま用いた（図4）。

調査対象者（被験者）は、綾部市立上林中学校の3年生と、京都府立綾部高等学校の3年生である。上林中学校は、上林の中・東部を学区としており、綾部高校は、綾部市全域を学区としている。有効票は、上林中学校48、綾部高校87であった。

ることにする。井上（1977）は、東北弁、東京弁、関

表2

郷愁 評価	知的 評価	情的 評価	
+	-	±	ナル
+	+	±	テヤ

表3

郷愁 評価	知的 評価	情的 評価	代 表	
+	-	-	東北 弁	（辺境型） 田舎型
-	+	+	東京 弁	（中央型） 近代都市型
+	-	+	関西 弁	古都型

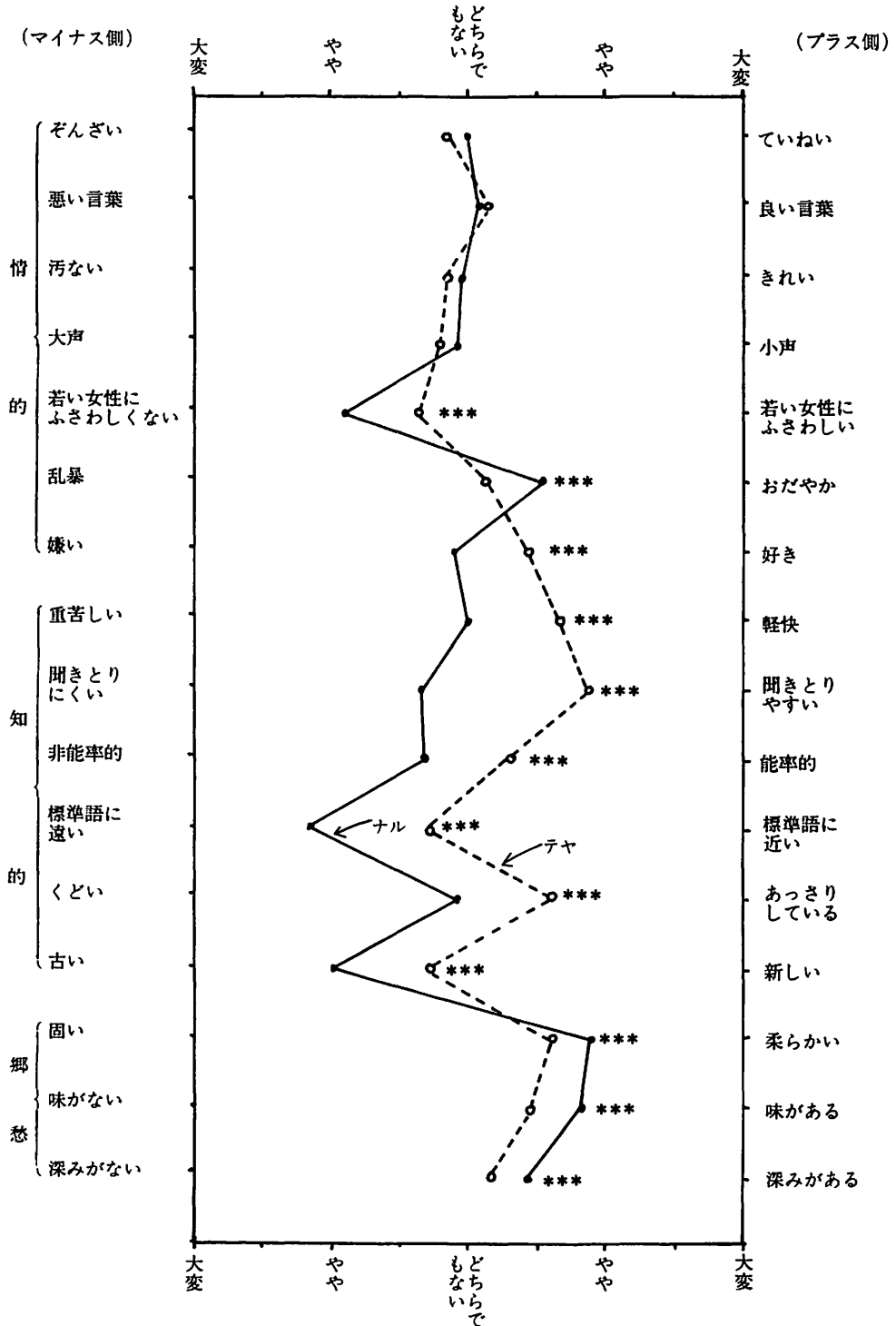
井上（1977, p. 87）

次に知的評価であるが、東京弁、テヤでプラスになっている。井上（1977）の調査の中で東京弁は共通語

西弁に対する評価傾向から、三方言を表3のように分類している。

まず、本調査の結果と井上の結果のうちで一番はつきりと特徴の現われているのは、郷愁評価においてである。郷愁評価でプラスなのは、ナル、テヤ、東北弁、関西弁であり、これらはすべて方言的である。他方、郷愁評価でマイナスなのは、共通語の基盤をなす東京弁だけである。これらのことから、郷愁評価でプラスを示すのは、方言の特徴といえよう。図2では、ナルの方がテヤよりも郷愁評価でプラスの傾向が強い。ナルはテヤよりも一層方言的であるといえる。

図2 ナル、テヤに対する評価



*Pr < 0.10, **Pr < 0.05, ***Pr < 0.01 以下他の図でも共通

に一番近い方言であり、ナルとの比較においてテヤは綾部市内では地域共通方言としての役割を果たしている。以上のことから、知的評価は、その方言のもつ共通語的性格を示すものと考えられる。

さて、知的評価の高さというのは、言語としての機能性の高さを反映するものであり、それが共通語として認知されるための条件になっていると考えられる。

それでは、情的評価とはいったい何を意味するのだろうか。東北弁でマイナス、東京弁、関西弁ではプラス、そして、ナルとテヤで中性であるということから、これは、方言のもつ社会的勢力の強さのようなものを表わしているのではなかろうか。つまり、その言語共同体の有する勢力の強さである。

言いかえれば、ある方言が広く普及しているということは、共通語的性格を示す知的評価においてプラス、また、社会的勢力を示す情的評価においてもプラス（少なくともマイナスを示してはいない）であると考えられていることと、無関係ではなかろうと考える。

関西へ東京弁がなかなか受け入れられない原因は、井上（1977）の研究で、京都の堀川高校の生徒が、他の地域の高校生の反応とは対照的に情的評価で東京弁をマイナスに評価していることが、それを端的に示している。

以上のように、方言イメージについて一応の概括的考察を試みたが、より明確な結論を得るためには、評価語の選定やその分類にもっと検討を加えることによって、さらに洗練された調査票を作成することが必要である。

2. 性別による差

表4 性別による方言評価の差異

ナ ル	テ ヤ
重苦しい—軽快 (女<男) 非能率的—能率的 (女<男)	味がない—味がある (女<男) 非能率的—能率的 (女<男) きらい—好き (女<男) 若い女性にふさわしくない—ふさわしい (女<男)

<はPr<0.05, <=<はPr<0.01
(ex.) 「重苦しい—軽快」ならば女に「重苦しい」男に「軽快」と反応する傾向が強い (Pr<0.05で) ことを表す。以下他の表でも共通。

全体的に、女性は方言をマイナスに評価する傾向がある。女性は、方言使用ということに否定的感情をもっているためであろう。このことは、方言変容が女性から始まることを、女性の方言に対する態度という点から裏づけている。

テヤに関して「きらい—好き」や「若い女性にふさわしくない—ふさわしい」で、女性が男性よりもマイナスに評価しているのは、ナルに対してより好感をもっているわけではもちろんなく、テヤに対してさえ拒否的な態度を示しているためと考えられる。そして、このことは、テヤ使用地域にハルが侵入する場合も、女性層から早く広まっていくだろうということを暗に語っている。

3. 居住地域による差

表5 居住地域による方言評価の差異

ナ ル	テ ヤ
重苦しい—軽快 (非上林<上林) 標準語に遠い—近い (非上林<上林) 聞きとりにくい—やすい (非上林<上林)	汚い—きれい (非上林<上林) 深みがない—ある (非上林<上林)

ナル、テヤを問わず、方言に対して上林群は全体的にプラスの評価を与えている。

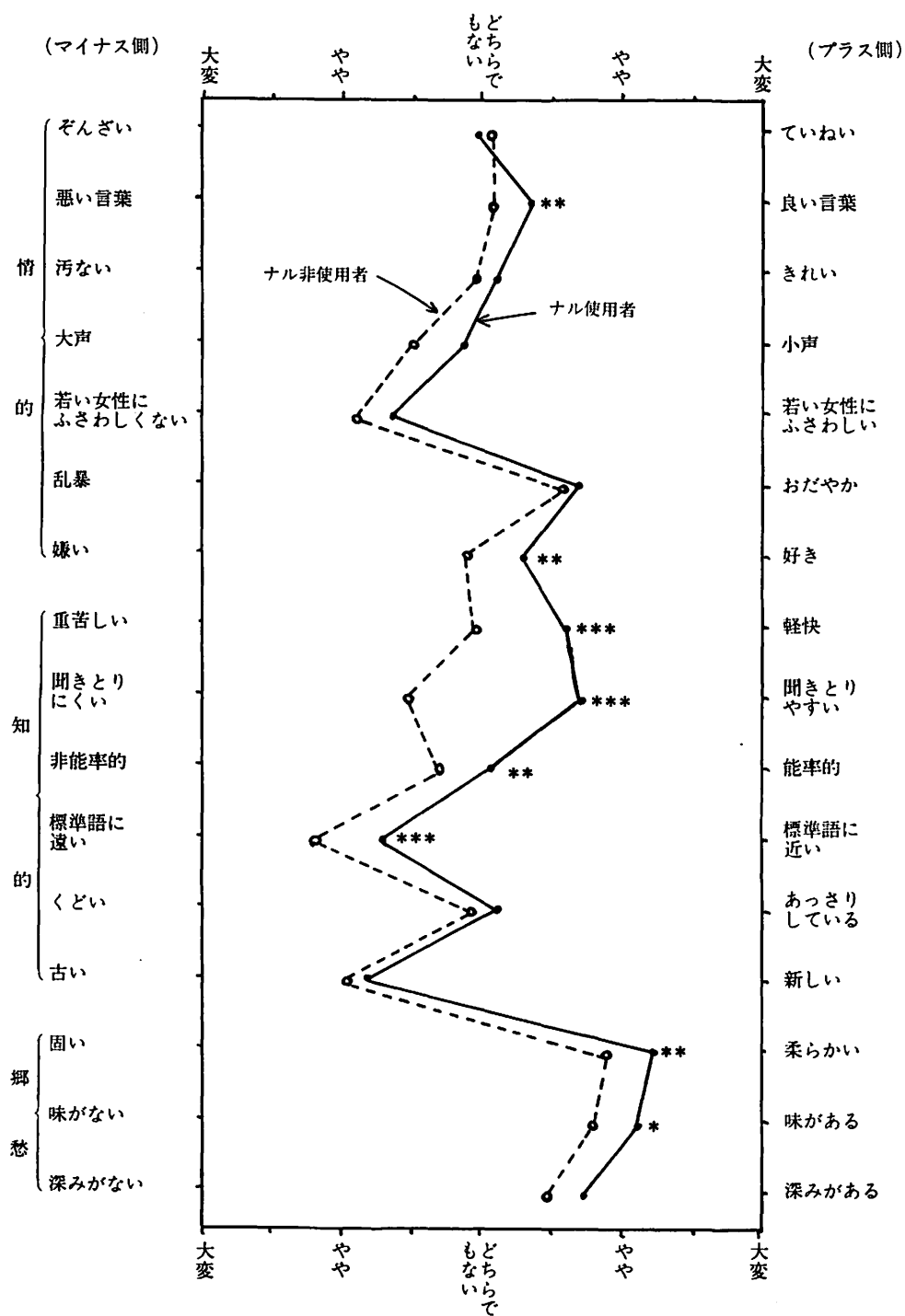
これには、ナルを「聞きとりやすい」とする居住地域による特徴が反映されている点もあるが、上林群のほとんどが中学3年生であり、非上林群はすべて高校3年生ということが影響している点が大きいと考えられる。つまり、居住地域による差異ではなく、年齢による差異であるのかも知れない。高校3年生にもなると、かなり豊富な方言体験や言語についての知識をもっているため、それだけ地元の方言に対する評価が厳しくなるとも考えられる。

4. 現在のナル使用の有無による差

ナルに対する評価では、相当はっきりとした相違が認められた。そこで、ナルに対する評価の違いはグラフによって示すことにする（図3）。

ナルを現在使用する者は、そうでない者よりも全項目にわたってナルをよりプラスに評価している。中でも、知的評価項目においては、特に高くプラスに評価

図3 ナル使用の有無によるナル評価



している。

先に述べたように、知的評価とは、その言語が広く普及しているという共通語の性格を示すものである。ナルを使用しているという行動に現われた否定しえない事実は、ナルが普遍的なものであるという方向に判断を向けさせている。つまり、同じ方言に対する評価でも、それを使用している人の評価というのは、それを使用していない人の評価よりも、その方言の機能性をより高く認めるわけである。ナルを使用する者がナルに与える評価のパターンは、〔情的評価土、知的評価十、郷愁評価十〕ということで、表2に示されたテヤに対する評価のパターンと同一の形をとる。

表6 ナル使用の有無によるテヤ評価の差異

テ ヤ
汚い—きれい (ナルを使用せずとする)
乱暴—おだやか (ナルを使用せずとする)
味がある—味がない (ナルを使用せずとする)
悪い言葉—良い言葉 (ナルを使用せずとする)

テヤに対しても、ナル使用者はナルを使用しない者よりも4項目にわたり有意にプラスの評価をしている(表6)。つまりナルを使用する者(そのほとんどが中学生)は、テヤに対しても寛容な評価をしているといえる。

しかし、有意差が認められた4項目中に、知的評価に含まれる項目は一つもない。このことから、

方言使用と知的評価との間の密接な関係が指摘できる。

5. ナル体験の有無による差

「ナル体験」とは、ナルを聞いたことがあるかどうかを問題にしている。ここでは、ナルを聞いたことがない者をもとにして、次の二点について比較する。(A)〈ナルを聞いたことのない人——ナルを聞いただけの人、使ったことのある人、現在も使う人〉についてと(B)〈ナルを聞いたことのない人——ナルを聞いただけで使うことも使ったこともない人〉についてである。

(A)〈ナルを聞かず——聞いた、使ったことあり、現在も使う〉

ナルに対する評価については、図3の〈現在ナルを使用する人——使用しない人〉で集計した結果と異なる点だけを示した(表7)。

〈ナルを聞いた、使ったことあり、現在も使う〉グループは、前項の〈現在ナルを使用する〉グループよりも、一層、知的評価に関してはナルをプラスに評価す

表7 図3との相違点

ナ ル
古い—新しい (ナルを聞かず聞いた、使う) くどい—あっさりしている (ナルを聞かず聞いた、使う) 固い—柔かい (有意差ナシ)

表8 「ナルを聞かず一聞いた、使う」によるテヤ評価の差異

テ ヤ
聞きとりにくい—やすい (ナルを聞いた、使うく聞かず)

る傾向がある。知的評価の全項目にわたって、有意にプラスの方向へ評価している。換言するならば、ナルを聞いたことがないグループは、知的評価においてナルをマイナスに評価する傾向が強いということである。

知的評価という共通語の性格を表わす項目において、〈ナルを聞いたことがない〉グループがマイナスに評価するのは、ナルが使われているという事実を知らないのだから当然の結果であるといえる。

テヤに対する評価については、一項目だけで差があり、ナルを聞いたことがない者は、テヤをより「聞きとりやすい」と答えている(表8)。これは、ナルが「聞きとりにくい」ということに対する相対的評価の結果でできた差であると考えられる。

(B)〈ナルを聞かず——聞いただけで使うことも使ったこともない〉

まず、テヤについては、前述したのと同様の結果がでている。

次に、ナルについてであるが、ナルを「新しい」と

表9 〈ナルを聞かず一聞いたが使わず〉による方言評価の差異

ナ ル	テ ヤ
古い—新しい (ナルを聞かず聞いたが使わず) くどい—あっさりしている (ナルを聞かず聞いたが使わず) 悪い言葉—良い言葉 (ナルを聞かず聞いたが使わず) 聞きとりにくい—やすい (ナルを聞かず聞いたが使わず)	聞きとりにくい—やすい (ナルを聞いたが使わずく聞かず)

評価するのは、ナルを現在使用している者や使ったことがある者ではなく、聞いただけの者であることがわかる。つまり、ナルという形式自体の歴史的事実とは無関係に、自己の体験に基づいてナルが新しいことばだと判断しているわけである。

ナルに対する評価で問題にされるべきことは、ナルを聞いたことがない者がナルをマイナスに評価する傾

向があるということである。特に、聞いたことがない方言であるナルを「悪い言葉」だと評価する傾向がある点には注目したい。人には、未知の方言に対して、それをマイナスに評価する心理的傾向が存在していて、一旦、その方言を耳にすれば、そうした心理的傾向は弱まるということであろう。ここには方言イメージにおける、その方言に接したことがあるか否かの体験の占める比重の大きさが浮き彫りにされている。そして、このような心理的傾向というものが、方言に対する偏見発生^(注4)の端緒をなしているといえる。

6. テヤの使用頻度による差

これは、〈テヤを時々使う——よく使う〉によって方言イメージがどう違うかを比較したものであるが、ナル、テヤ各々について有意に差のある項目は全く認められなかった。このことについては、テヤの使用が中・高校生の間に普く広まっていることが主要な原因と考えられる。テヤの使用頻度になると被験者の主観的な判断に負う面が大きく、テヤを「時々」使うと回答した者もそれはテヤに対する否定的態度の現われであると考えられる。その結果、実際にはテヤを「よく」使っているために、テヤを「時々」使うか「よく」使うかということが、被験者を質的に分類するための基準になりえなかったのではなかろうか。

5. 地域イメージ

方言イメージとの関係を見る前に、まず、地域イメージだけの結果をみることにしよう。(図4)

上林は、美しく静かで、さびしく田舎くさい土地であり、綾部よりも広い面積をもち、やや寒く古い土地であるというイメージがもたれている。これに対して、綾部は、上林ほどではないが、いくらか田舎じみた感じがして、狭い土地であると考えられている。その他の項目については、中性的な評価がほとんどであった。そして、この結果は、両地域のもつ実際の特色にほぼ近いものである。

ところで、今柴(1969)の研究では、「じめじめ因子」は東北地方の特色を一番よく表わすものであった。本調査では、上林と綾部の間にじめじめ因子に関して差がなく、両者ともに中性的な評価であった。また、井上(1977)の研究で情的評価マイナスは東北弁だけであり、本調査のナル、テヤについては中性的な反応がなされていた。

6. 方言イメージと地域イメージの関係

じめじめ因子にしても情的評価にしても、ともに直

観的で感覚に頼る面が大きい評価項目であり、情感的印象を求めているという点で共通性がある。それゆえ、東北のように、その地域が気候的環境においても精神的風土においても陰気で暗いイメージを与えるならば、それが、その地域の方言である東北弁に投射されて、情的評価をマイナスにするのではないかと考えられる。

このようなことから、方言イメージの情的評価と地域イメージのじめじめ因子との間には、相互関連の可能性が推定される。

以上、地域イメージの評価項目と方言イメージの評価項目の関連性について若干の考察を加えたが、つぎには、方言に対してプラスの評価をするかマイナスの評価をするかで被験者を二群に分けて、地域イメージとの関係を統計的な検定を施して検討する。

ただし、この調査の場合、〔東北弁—東北〕、〔京都弁—京都〕というような方言と地域との一体的な関係が被験者の頭の中に存在するかどうかということが問題になる。〔ナル—上林〕、〔テヤ—綾部〕というような方言とそれが使用されている地域との間の密接な関係が、被験者のイメージの中に存在しなければ意味がない。綾部でナルを話せば、「上林弁」とか「上林や」と言われるという事実は、綾部市内においては、ナルは上林のことばだと考えられていることをはっきりと示している。しかし、テヤが綾部のことばとして受け取られているかどうかということになると、疑問が残ることを記しておく。テヤは、既に上林にもかなり普及しており、また、綾部市に限らず近隣市町村の間で広く使われていることを被験者もある程度知っていると思われるからである。これは、テヤに対して「綾部弁」というような呼び方がなされないという点からも考えることである。

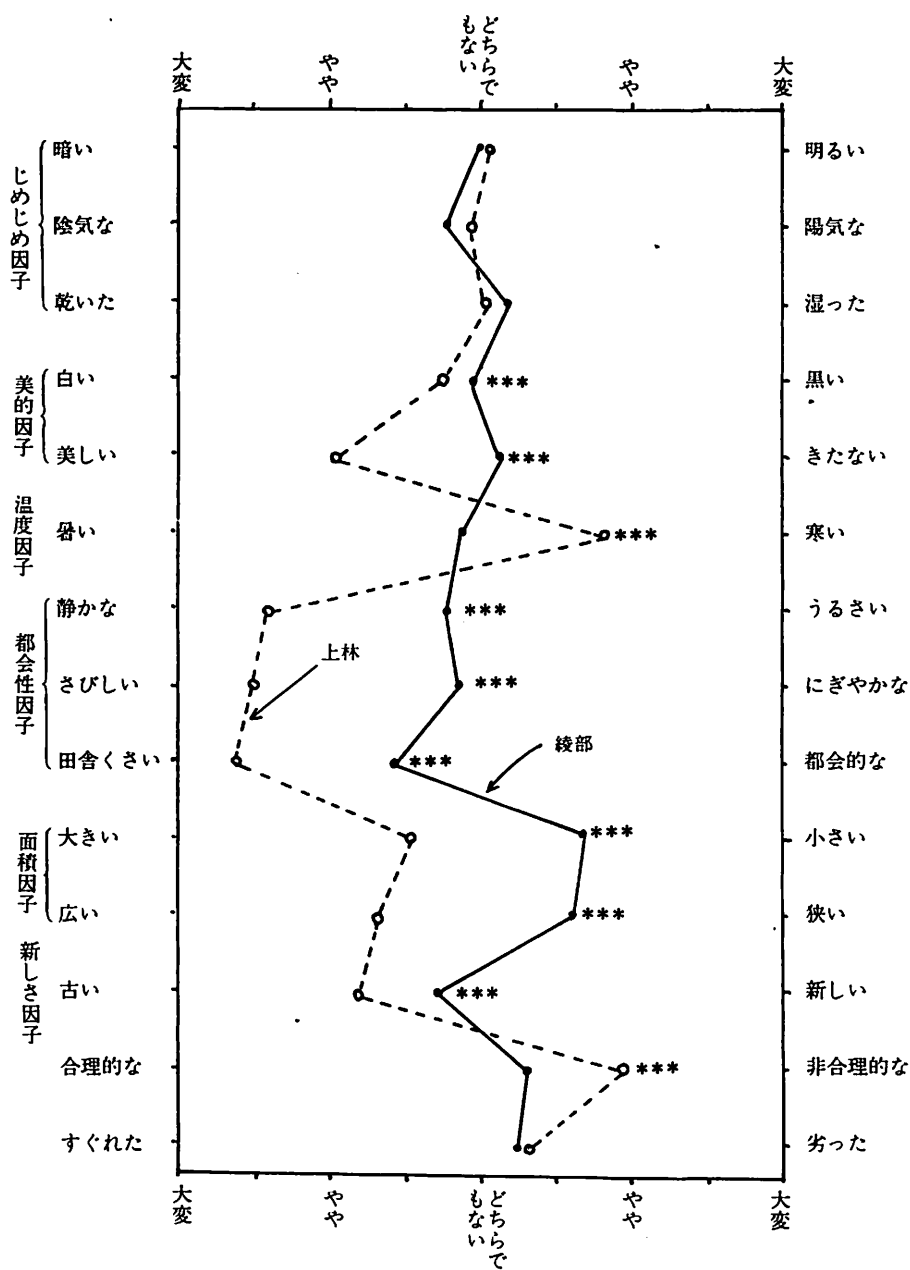
1. ナル評価プラス群とマイナス群の差

表10 ナル評価「プラス群—マイナス群」による地域評価の差異

上 林	綾 部
美しい—きたない (プラス群<マイナス群)	広い—狭い (マイナス群<プラス群)
暗い—明るい (マイナス群<プラス群)	白い—黒い (マイナス群<プラス群)

まず、表10に示されているように、ナルをプラスに評価するグループは、ナルをマイナスに評価するグループよりも、上林を美しく、明るい^(注4)とプラスに評価し、綾部を狭く、黒い地域とマイナスに評価している。つ

図4 上林, 綾部に対する評価



まり、方言をプラスに評価する者は、その使用地域もプラスに評価する傾向があるというように、方言イメージと地域イメージの関連の存在可能性が見出された。

しかし、この中には、ナルを今までに聞いたことがない者も含まれていて、彼らはナルと上林を結びつけ

表11 ナルを聞いたことがない者を除いたナル評価「プラス群—マイナス群」の地域評価の差異

上 林	綾 部
大きい—小さい (プラス群<マイナス群)	白い—黒い (マイナス群<プラス群)

て評価しているとは判断しがたい。そこで、ナルを聞いたことがない者を除いて、ナル評価のプラス群、マイナス群との差をみると表11のようになる。

これは、表10で出た傾向を全く変えるものではないが、有意差の認められる項目が減って、方言イメージと地域イメージの関連性を弱める結果が出ている。方言イメージと地域イメージとの間に関係があるなら、有意差を生ずる項目は増えるはずであるが、結果はその逆である。どうしてこのような結果が出たのか、今の段階では説明することはできない。

また、ナル評価プラス群には、ほとんど上林の者ばかりが含まれているのではないかとことも考えられるが、その可能性は否定される。なぜならば、ナルをプラスに評価している者は、上林をプラス、綾部をマイナスに評価するという結果が出ているのに対して、上林群は、上林イメージ、綾部イメージをともにプラスに評価している。この点で両者の間にはっきりとした相違があるからである。

2. テヤ評価プラス群とマイナス群の差

表12に示されている通り、テヤをプラスに評価する者はマイナスに評価する者より、上林を明るく白い地域とプラスに、また、綾部を寒くなく陽気な地域だと、ともにプラスに評価している。

これは、テヤが綾部のみの形式ではないためで、テヤをプラスに評価する者は、それが使用されている地域としての上林と綾部をともにプラスに評価していると考えられる。ここでも、方言に対して好意的な評価をする者は、それが使用されている地域に対しても好意的な評価をする傾向が現われているとみることができる。

以上のように、方言イメージと地域イメージの関係

表12 テヤ評価「プラス群—マイナス群」による地域評価の差異

上 林	綾 部
暗い—明るい (マイナス群<プラス群) 白い—黒い (プラス群<マイナス群)	暑い—寒い (プラス群<マイナス群) 陰気な—陽気な (マイナス群<プラス群)

は、いまだ判然としないところも多いが、この両者の関係の可能性についていくらか統計的に実証できた。今後はさらに、方言イメージ、地域イメージの評価項目の選定にもっと配慮をするとともに、両イメージの中の因子間の関連性についても検討を加えなくてはならないと考える。

〈付記〉

調査するにあたっては、上林中学校の村上肇学校長、綾部高校の西村直樹先生のお世話になったことを記して感謝申し上げます。

(注1) ここで一つ注意すべきことは、テヤは知的評価でプラスになっているが、これはナルとの比較を求めたためで、例えば、東京弁と比較すればマイナスになるであろうことは、十分に予想される。

(注2) 従来、ある一定の地域で広く使用されている方言を地域共通語という呼び方がなされているが、筆者は、共通語とは全国共通語を意味するものとして、地域共通語と呼ばれているものも方言としての特徴を備えている以上、それは、地域共通方言と呼ぶことが適切と考える。

(注3) 酒井(1980) p74—76参照。

(注4) 全被験者のナルに関する項目(16項目)ごとの平均値を加えてその和(A)を求め、それと各被験者の項目ごとの値を加えた和(B)を比較して、 $A < B$ をナルをプラスに評価する傾向の者、 $A > B$ をナルをマイナスに評価する傾向の者とした。テヤについても同様の手続をとった。

〈文献〉

井上史雄1977「方言イメージの多変量解析(上・下)」

『言語生活』308号、309号筑摩書房

今栄国晴1969「地方イメージにおける近畿圏の特徴—意味微分法と連想法による—」『近畿圏』鹿島出版会

酒井充1980「方言変容に関する社会言語学的研究の試み」『日本語研究』第3号 東京都立大学日本語研究会

(1981年4月脱稿)

(公立豊岡病院勤務)